研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著， 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概　　要
（著書(欧文)）				
（著書(和文)） 1. 私小説ハンドブック	共著	2014年3月	勉誠出版 （全320ページ）	（全体概要）私小説に関連する109名の作家案内を始め、海外の私小説事情、年譜･私小説名作150選などを中心に論及した。 （担当部分概要）「作家案内」の項で、加納作次郎･佐藤春夫･島村利正･中野孝次･野口冨士男を担当。（p. 79、p. 103、p. 110、p. 139、p. 143を担当） （監修：勝又浩・秋山駿、編著：私小説研究会、分担執筆：梅澤亜由美、齋藤秀昭、藤田知浩、市川奈津美、伊藤博、奥山貴之、姜宇源庸、櫻井信栄、長岡杜人、沼田真里、山内洋、山中秀樹、李英哲、渡辺賢治）
2. みくにことば	共著	2015年5月	中日出版 （全199ページ）	（全体概要）国語学・国文学・国語教育学など、各分野の最新の研究成果を提示。 （担当部分概要）「露伴の晩年」について考察し、初期露伴文学から続く「縁起」や「連環」などが、晩年の『音幻論』や『芭蕉七部集』評釈など、言語論や評釈にまで波及している点を論じた。（pp. 111～122を担当） （編著：国語学懇話会、分担執筆：小林宗治、榊原邦彦、中井貞子、渡辺達郎、伊藤一重、片山　武、渡辺賢治、武藤清吾、相馬明文、北郷聖、朴景淑）
3. みくにことば第二輯	共著	2018年10月	中日出版 （全205ページ）	（全体概要）国語学・国文学・国語教育学など、各分野の最新の研究成果を提示する第二輯。 （担当部分概要）露伴「硯海水滸伝」と『文豪ストレイドッグス』の比較を行い、文学作品が多様なメディアを通じて再話化された際、メディアとイメージの性質や機能、視覚効果などを論じた。（pp. 138～143を担当） （編著：国語学懇話会、分担執筆：小池保利、片山　武、榊原邦彦、渡辺達郎、恒松　侃、山本浩子、渡辺賢治、相馬明文、森　晴彦、徳永直彰）

4. 工学系卒論の書き方	共著	2020年3月	コロナ社 （全185ページ）	（全体概要）工学系の大学や高専の学生がわかりやすく、かつ論理的な文章を書くための論文作成ガイドブックとして作成した。 （担当部分概要）自身の担当する「１章　文章はコミュニケーションツール」では、論理的展開に際しての文章表現のルールを、具体例を踏まえながら説明。イラストを用いつつ、項目ごとに重要ポイントを分かりやすく説明した。（pp. 1～59、pp. 181～183を担当） （編著：別府俊幸、渡辺賢治）
5. メディアの中の仏教―近現代の仏教的人間像―	共著	2020年3月	勉誠出版 （全352ページ）	（全体概要）近現代のメディアの発達が宗教という領域の創作行為や情報共有、知識の扱い方へも大きな変化を生じさせたことに注目し、各論を展開。 （担当部分概要）幸田露伴作品を視座に、日本近代文学の表紙や挿絵に見られる視覚表象の特性を抽出、現代の複合的メィアが生み出す仏教表象との接続性を論じた。（pp. 179～202を担当） （編著：森覚、分担執筆：大澤絢子、高橋洋子、嶋田毅寛、渡辺賢治、渡辺隆明、猪股清郎、大道晴香、今井秀和）
（学術論文（欧文））				
（学術論文（和文）） 1. 幸田露伴研究―「一口剣」を中心に―	単著	2006年3月	『大正大学大学院研究論集』第三十号 〈後、『国文学年次別論文集 平成十八年版』近代分冊（2009年5月 学術刊行会）収録〉	本稿では修士論文『幸田露伴研究―「一口剣」を中心に―』の内容から抜粋、加筆修正を施して論じた。従来、先行研究ではほとんど論じられていなかった「一口剣」に焦点を当て、作品分析や執筆状況等を中心に考察。執筆時に記された「地獄溪日記」や坪内逍遙宛書簡の検証を行い、また当時の露伴の身辺事情を精査し、執筆時の情況から、「一口剣」はテーマとモチーフが密接に結びついた作品であることを論じた。（pp. 89～101）

2. 露伴の北海道時代	単著	2006年3月	『国文学試論』第十六号 〈後、『国文学年次別論文集 平成十八年版』近代分冊（2009年5月 学術刊行会）収録〉	露伴は明治十八年に電信修技学校を卒業し、十等技手として北海道後志国余市へと赴任しているが、当地における動向は未詳のまま現在まで至っており露伴文学「最大の空白期」（柳田泉）となっている。本稿では余市で露伴と交流があったとされる網元の娘･浜谷千代の子孫である今善作が記した『東開ダルマ和尚と幸田露伴』（昭和四十八年十二月私家版）を中心に考察し、伝記等では紹介されていない余市時代の露伴について検証した。（pp. 21～31）
3. 露伴の「風流」について―明治二十三年の問題―	単著	2006年3月	『国文学踏査』第十八号 〈後、『国文学年次別論文集 平成十八年版』近代分冊（2009年5月 学術刊行会）収録〉	露伴の「風流」に対する疑問に至った経緯について、最近発見された「大詩人」草稿を始め、当代文学における反応を踏まえながら整理し、明治二十三年の問題を考察した。既に「大詩人」草稿の執筆段階において、露伴の内奥には「風流」と「仏」、「風流」と「魔」といった対極的見地が混交しており、併せて女性問題や社会問題が「風流」疑問の契機に繋がっている可能性も指摘、問題の所在は複合的要因から成ることを論じた。（pp. 153 ～165）
4. 幸田露伴「風流悟」試論―明治二十三年の問題その後―	単著	2007年3月	『大正大学大学院研究論集』第三十一号 〈後、『国文学年次別論文集 平成十九年版』近代分冊（2010年3月 学術刊行会）収録〉	「風流悟」では「恋と我慾の離れざる想に沈み（中略）我は悲しみ泣きし恨み嘆ぜし、然れども我慾の念をば幸に折伏したりし故に左る悪境には入らざりし」というように、「恋と我慾」に翻弄され「悪境」へと入らない「我」を見出していることが読み取れる。本稿では対極的作品と目される「艶魔伝」において描かれた、色道追求の世界と完全に断絶した世界が「風流悟」で提示されていることを指摘、露伴の恋愛観の振幅を論証した。（pp. 111～123）
5. 幸田露伴研究―「風流 魔」を中心に―	単著	2007年3月	『国文学試論』第十七号	「風流魔」の発表遍歴を中心に「艶魔伝」との関わりも踏まえ考察。「艶魔伝」の主眼として挙げられる「色道裏の手」が「誠の天道」へ到達するといった内容について、『二日物語』や「新浦島」の崇徳院の亡霊や浦島次郎の魔道執心に繋がる可能性を指摘。併せて「風流魔」の平七とお浜から窺える「運命の守」「人生の勢利」にも通底していることを指摘し、後期露伴文学の歴史小説に影響を与えていることを論証した。（pp. 21～29）

6. 露伴『二日物語』論―「新浦島」との関わりを中心に―	単著	2007年3月	『国文学踏査』第十九号	『二日物語』の原題「呵風流」の予告文では「美人は忽然として頑石と化し」とあり、この部分が後に発表する「新浦島」に踏襲されていると考えられる。本稿では『二日物語』と「新浦島」との関係を考察し、二作品の発表を通して明治二十三年の問題以来、慢性的に続いてきた色欲すなわち情念を始めとする魔道執心といった視点に対し、露伴は数年来の煩悶葛藤の末、一つの受け止め方を見出したことを指摘した。（pp. 106～118）
7. 私小説･理論と実作〈特集小論〉「坪内逍遙」	単著	2007年3月	『私小説研究』第八号	掲載誌「私小説・理論と実作」という特集テーマのもと、坪内逍遙『小説神髄』と『当世書生気質』から窺える私小説性について言及した。私小説的な要素抽出のため、便宜的に「語り手が一人称」「自伝風である」「実名が出てくる」「主人公が作家か、あるいはそれに近い職業」といった項目を設定し、そこから『当世書生気質』は私小説としての性格よりも、いわば模写小説としての性格であることを論証した。（pp. 32～33）
8. 幸田露伴研究―再考・北海道時代―	単著	2008年3月	『国文学踏査』第二十号	拙稿「露伴の北海道時代」を、もう一歩深めるべく『改正官員録』や『官報』、『北海新聞』といった当時の公的資料や地方紙を拠り所として、未だ伝記では触れられていない余市時代における露伴の動向を考察。余市赴任の経緯、電信分局や露伴下宿先の所在地の特定、電信分局内の人員や仕事内容、当時の余市の状況、露伴と交流のあった人々などについて実証的に検証し、当地における露伴の動向を明らかにした。（pp. 93～106）
9. 〈私〉表現の夜明け前―楊逵「新聞配達夫」を視座として―	単著	2008年3月	『私小説研究』第九号	掲載誌「アジアの〈私〉表現」という特集テーマのもと、台湾の作家・楊逵「新聞配達夫」から窺える私小説性を考察。作品からは「労働者と支配者」という二項対立の構図を始め、日本プロレタリア文学との類似性、当時の台湾総督府つまり日本の台湾植民地政策への批判が窺えることを指摘。私小説性への直結は認められないものの、植民地政策や階級対立を軸とした人間観に基軸が置かれていることを論証した。（pp. 35～37）

10. 露伴の電信修技学校時代	単著	2009年3月	『国文学試論』第十八号 〈後、『国文学年次別論文集 平成二十一年版』近代分冊（2012年9月 学術刊行会）収録〉	明治十六年に電信修技学校に入学した露伴の動向について検証。卒業後の地方勤務に際しての義務年限について、伝記では「在校期間」を含め満五ヶ年間の勤労義務としているが（柳田泉）、明治十五年四月二十七日付「太政官布達第九外貌」に拠ると、実は「卒業ノ月」から「満五ヶ年間」勤務することが判明した。余市での義務年限が「三年間」であったとされてきた定説が実際には「四年間」であったことを明らかにした。（pp. 17～26）
11. 「私」表現の美しさ―三浦哲郎「忍ぶ川」―	単著	2009年3月	『私小説研究』第十号	掲載誌の「私小説の可能性」という特集テーマのもと、三浦哲郎「忍ぶ川」から導き出せる私小説の可能性について言及。「忍ぶ川」では作者・三浦自身が抱える「血」の問題に対し真正面から描くのではなく、むしろ「私」と志乃の純愛を真正面から描くことで、それを乗り越えるべく前向きな「生」の道標が描かれていることを指摘。同じ「私小説」でも川崎長太郎など、自身の表裏全てを示す私小説スタイルとは異なる点を指摘した。（pp. 29～36）
12. 露伴の迎曦塾時代	単著	2010年3月	『国文学試論』第十九号	就学時代の露伴の動向については、今日まで未詳な部分が多く存在しており、迎曦塾についても同様である。本稿では露伴の迎曦塾在学時の動向を検証すべく、従来の柳田泉『幸田露伴』や塩谷賛『幸田露伴上･中･下』といった伝記を始め、遅塚麗水の回想に偏ることなく当時の資料を拠り所に、塾の所在地、入塾費用、講義内容、在学期間、塾内の状況、当時の社会状況等の項目に分けて考察し、不明な点を明らかにした。（pp. 16～25）
13. 幸田露伴「天うつ浪」試論―創作から学究へ―	単著	2010年3月	『国文学踏査』第二十二号 〈後、『国文学年次別論文集 平成二十二年版』近代分冊（2013年8月 学術刊行会）収録〉	当代文学や社会との関わりを踏まえつつ、未完に終わった「天うつ浪」を考察。未完に至った背景として、次兄･郡司成忠の千島列島探訪や、日露戦争の勃発に伴う時流の変化が主に影響を与えており、併せて先に発表した「風流微塵蔵」の中絶で意識した、「想」と「実」の均衡も関連していることを指摘。これらの考察を通して、従来の小説を生み出してきた露伴の創作態度が以後、学究的に移行することを論証した。（pp. 68～81）

14. 幸田露伴研究―「プラクリチ」を中心に―	単著	2011年3月	『大正大学大学院研究論集』第三十五号	「プラクリチ」は『首楞厳経』などに登場する摩登伽女の名前であり、露伴は既に明治二十三年の煩悶葛藤に際して「般若心経第二義注」（没後発表）の注解においてこの経典について触れている。本稿では「プラクリチ」として発表した意図について考察し、初期に扱った材源を用いながらも阿難や摩登伽女といった歴史上（仏典上）の人物に「運命の守」や「人生の勢利」といった新たな視点を見出していることを論証した。（pp. 35～41）
15. 露伴の就学時代―東京師範学校付属小学校から東京府第一中学校まで―	単著	2011年3月	『国文学試論』第二十号 〈後、『国文学年次別論文集 平成二十三年版』近代分冊（2015年4月 学術刊行会）収録〉	露伴の東京師範学校付属小学校時代から東京府第一中学校時代までを検証。当時の学校所在地、入学時期、卒業時期、修業年限、授業内容、交友関係等、現存する学校関係の資料を駆使することによって、柳田泉や塩谷賛らの伝記との差異や今まで未詳であった部分を解明した。いずれも制度が確立していない状況下での就学であったことが窺える。後年の作家デビューに接続する素地がこの時期に培われていたことを論証した。（pp. 41～50）
16. 幸田露伴「幻談」試論―幽玄世界との境界―	単著	2011年3月	『国文学踏査』第二十三号 〈後、『国文学年次別論文集 平成二十三年版』近代分冊（2015年4月 学術刊行会）収録〉	「幻談」では「幻」を「現実」と信じること、換言すると「無」を「有」と信じる凡夫の妄想や執われ、すなわち「因縁假和合」への接続が示されている。功利性や合理性重視の近代化が進む中、旧来の職人気質を示している「幻談」には初期作品から通底する視点が認められる。縁起の理や因縁に翻弄されながらも生きる人間の姿が描かれた後期露伴文学は、そこに特化するだけでなく現実世界と幽玄世界の表裏一体が巧みに示されていることを論証した。 （pp. 77～90）
17. 幸田露伴研究―「雪たたき」を中心に―	単著	2012年3月	『大正大学大学院研究論集』第三十六号	「雪たたき」は縁起を基軸に様々な境遇の人間が出会い、交差し連環していく鮮やかな人間模様が描かれていることを指摘。そこには「風流微塵蔵」や「運命」から続く、歴史上の人物に拠りながらも叙述する、露伴が様々な試みを行った末に辿り着いたスタイルとして認められることを論証した。また登場人物の「損得勘定」「ケチ」といった言動を通して、露伴の当代社会への意識も窺え、他の露伴作品や新発見の資料等を用いて論証した。 (pp. 127～133)

18. 幸田露伴研究―出生等の検証を中心に―	単著	2012年3月	『国文学試論』第二十一号 〈後、『国文学年次別論文集 平成二十四年版』近代分冊（2017年4月 学術刊行会）収録〉	現在も露伴の出生に関しては、煩瑣な状況にあることから露伴の回想（「少年時代」）を始め『武鑑』や『官員録』等の当時の資料を駆使し、伝記も参看しつつ輪郭を把捉すべく検証を行った。まずは露伴出生後に繰り返される幸田家の転居時期や所在地を明らかにした。明治維新の激動期に出生した露伴だが、厳格な祖父母の風習をもとに過ごしており、微禄に変転する幸田家を祖父母の倹約で支えられていたことを論証した。（pp. 85～95）
19. 露伴の東京英学校時代	単著	2012年3月	『国文学踏査』第二十四号 〈後、『国文学年次別論文集 平成二十四年版』近代分冊（2017年4月 学術刊行会）収録	青山学院の前身である、東京英学校に在籍した露伴の動向を検証した。従来、伝記頼みの情報が中心となっていたが、本稿では当時を伝える学校側からの資料等を拠り所に、入学時期、在学期間、退学時期、学校の移転時期、交友のあった人物など、残存する当時の資料を可能な限り駆使しながら詳細を明らかにした。そこから英学校退学後の迎曦塾や電信修技学校との接続を視野に入れつつ露伴の英学校進学の意図を考察した。（pp. 61～71）
20. 露伴「連環記」試論―仏教との関わりを中心に―	単著	2013年3月	『国文学踏査』第二十五号	「連環記」成立時期や作品構成等を踏まえつつ、作品全体に底流する露伴の仏教への視点について考察。慶滋保胤から寂心、大江定基から寂照へと至る姿から、在家から出家へと身分を変える中に「法縁微妙」な世界観が描かれている点、また「生相憐れみ、死相棄つ」という認識が愛着という囚われから脱する点を指摘。昔時より露伴が抱いてきた仏教と愛（恋愛）との問題に対し、「愛別離苦」という視点の重要性を論証した。（pp. 85～98）
21. 国語教育におけるメディア教材の可能性と展開―中島敦「山月記」を一例に―	単著	2013年11月	『解釈学』第六十九輯	現在、高等学校国語科の定番教材（芥川龍之介「羅生門」や夏目漱石「こころ」等）は漫画化されており、その多様性が垣間見られる。こうした点に着目し、中島敦「山月記」を一例として、筆者の高校・高専での授業実践例を踏まえながら、読解の補完的役割としての漫画という、ビジュアルに重きを置いて地点からのアプローチの有用性を検証。活字だけでは読解が難解な場面展開や心情把握など、視覚的効果を媒介とした教材の意義を論じた。（pp. 35～39）

22. 幼少時の露伴―関千代塾への就学―	単著	2014年3月	『解釈学』第七十輯	本稿では関千代塾時代の露伴に着目し、従来の回想や伝記を参観しつつ未だ詳細が判明しない露伴の動向や塾の内情を当時の資料を駆使して検証。『近世偉人伝』や『官員録』、「文部省布達」から関千代の輪郭を捉え、『日本教育史資料 八』収載の「私塾寺子屋表 東京府」からは千代の弟・関雪江の漢学塾の情報を抽出し精査。雪江から漢学を学んだ露伴の父成延や兄・成常や成忠との機縁から露伴が千代女史に手習いを学び始めたことを論じた。（pp. 34～38）
23. 露伴「五重塔」試論―信念の披瀝―	単著	2014年3月	『国文学踏査』第二十六号	本稿では「五重塔」の主人公・十兵衛の心境の推移を中心に考察し、自らの信念に立脚した不動心の披瀝を検証。周辺人物との鮮やかな個性の交差のもと、作中に示された「因縁仮和合」を主軸に展開しており、後の「二日物語」や「風流微塵蔵」、「連環記」に接続する視点が胚胎していることを論証した。また、実在した谷中の五重塔建立に関する歴史を露伴自身、詳細に調べて作中に反映させていたことを指摘した。（pp. 170～183）
24. 幸田露伴「蒲生氏郷」小考	単著	2015年3月	『解釈学』第七十三輯	本稿では蒲生氏郷という歴史上の人物に仮託しつつ、真摯かつ潔い生き様が描かれている作品の底流に露伴文学のキーワードである「運命」や「縁起」に立脚して物語が展開していることを指摘。さらに並行して、露伴は歴史の「伝説」や「風聞」にも視点を向けた形で蒲生氏郷という人物像を描いており、『頼朝』発表をから続く「史伝もの」の成熟を指摘。それは同時期発表の「観画談」といった幽玄世界の提示にも接続することを論じた。（pp. 39～44）
25. 『頼朝』発表前後の露伴―作風と身辺の変化について―	単著	2015年3月	『国文学踏査』第二十七号	本稿では作品世界の考察と共に、発表前後の露伴の身辺状況を踏まえて考察。今まで「縁起」「運命」といった壮大なテーマを表現すると中絶や破綻を来していたが、『頼朝』発表を契機に、歴史上の人物に仮託しつつ作品世界の構築に至る特色を指摘。「史伝もの」としての本格的作品として位置づけられることを論証。なお、身辺状況の検証に関しては露伴全集未収録のエッセイ「女房を褒めよ」を提示し、作品発表当時の情況をより詳細に論じた。（pp. 92～104）

26. 「石化」という発想と可能性―露伴「新浦島」を視座として―	単著	2015年7月	『解釈学』第七十四輯	物語世界における「石化する話」は洋の東西を問わず存在する。そこには時間の断絶も付随しており、明治期には２４時間単位での時間の概念が大衆に広まった。このことを踏まえ露伴「新浦島」を視座として「石化」という発想とその特異性、併せて時間の断絶から現代表象文化つまりＳＦとの接続性にも言及。神話や伝説を経て文学作品に取り込まれた「石化」という発想は変遷変化を遂げて映画やアニメ、ゲーム等にまで波及していることを論じた。（pp. 35～41）
27. 露伴の処女作「風流禅天魔」について	単著	2016年3月	『解釈学』第七十六輯	露伴の処女作「風流禅天魔」は尾崎紅葉と淡島寒月の両名が原稿を読んだのみであり、あとは「糊細工をする折下貼となして」しまったため、世に発表されることなく終わった作品である。ただし、露伴の弟子・柳田泉は当該作品の構想を聞いており、その内容は露伴伝記から確認出来る。本稿では、当該作品の執筆に関する従来の言及内容を整理しつつ、断片的に伝えられている構想を検証し、文壇デビュー後に発表された作品との接続性を論じた。（pp. 39～45）
28. 中島敦「名人伝」と幸田露伴「一口剣」における求道性	単著	2016年11月	『解釈学』第七十八輯	中島敦「名人伝」と幸田露伴「一口剣」は、互いに一途に芸道を究める人間の求道性がそれぞれの作家の個性を踏まえ描かれている。本稿では両作品を比較し、そこから見出される特徴を検証した。互いに物語の展開と共に技術的修練から人間的修練へと突き抜けていく点を指摘、両作品には物質的囚われから解き放たれた、いわば「空」の境涯へと至る姿が一方ではユーモラスに、もう一方では確固たる信念で描かれていることを論じた。（pp. 35～39）
29. 露伴「いさなとり」試論―因縁を超越する力―	単著	2017年7月	『解釈学』第八十輯	「いさなとり」はクジラ漁を営む主人公･彦右衛門の紆余曲折した人生遍歴を主軸とした物語であるといえる。そこで、本稿では主人公と関連する周辺人物との複雑な関わりを精査し、それぞれの特徴を抽出。彦右衛門を取り巻く環境において、目には見えない「縁(えにし)」（因縁）によって相互に連関していくことを指摘。露伴文学の根幹を成す「因縁」や「縁起」との接続性を「五重塔」などの初期作品との関連性も踏まえ論証した。（pp. 41～49）

30. 露伴と一葉の居住空間―〈下谷区〉御徒町と上野西黒門町―	単著	2017年11月	『解釈学』第八十一輯	露伴と一葉が過ごした下谷区の街況や風土を中心に『明治東京名所図会』上下巻（平成四年七月 東京堂出版）収載の「新撰 東京名所図会」（東陽堂）等を参看し、当時の状況を把捉すべく実証的に考察した。特に従来、一葉研究側からほとんど論じられてこなかった黒門町時代の一葉に関して、一葉日記との照合も踏まえ、当時の動向について検証。部分的ではあるが、一葉の伝記研究の補完に繋がる成果を提示した。（pp. 19～25）
31. 〈下谷区〉御徒町と西黒門町の風土―露伴・一葉を中心に―	単著	2018年3月	『国文学踏査』第二十九号	下谷区御徒町時代の幸田露伴と同区西黒門町時代の樋口一葉の動向を考察。近隣である両町は江戸時代、「幕府御徒の組屋敷」が多かったが、明治維新を経て「大半市店」と変貌し、様々な店舗や邸宅が建ち並ぶようになった。そうした中で近隣には知識人が居住していたことも指摘。『新撰 東京名所図会』や『新撰東京實地案内』など、いわゆる「名所案内もの」の資料に拠りつつ両者の動向を実証的に論証した。（pp. 86～98）
32. 西黒門町と著名人たち―明治二十年前後の当地における文化・風土―	単著	2018年3月	『解釈学』第八十二輯	拙稿「露伴と一葉の居住空間―〈下谷区〉御徒町と上野西黒門町―」、「西黒門町という『磁場』―樋口一葉を始めとした６名の著名人―」の内容を補完する形で考察を重ねた。樋口一葉を始めとした六名の著名人が過ごした西黒門町一帯の文化や風土に関して、新たに発見した資料『東京商人録』を踏まえつつ検証した。今まで不明であった具体的な番地や店名が判明し、そこから著名人らが吸収した当地の文化や風土の輪郭を明らかにした。（pp. 21～25）
33. 一葉たち著名人が過ごした西黒門町の土地	単著	2018年11月	『解釈学』第八十四輯	幕末から明治維新まで当地一帯を所領していた石川家に関して検証し、当家は代々幕府から将軍の警備担当などを仰せつかっていた特徴を指摘。維新後も当地には下谷警察署が設立され、また一葉の父・則義も当地居住時には警視庁警視嘱として過ごしていた。なお、樋口家の近隣には荻野吟子や岡倉天心などの著名人も住んでいたことを指摘。現在の黒門町会も祭礼時において警備を担っていることから、警備の地という地理的特性での共通点も含めてを論じた。（pp. 21～26）

34. 温泉と人をつなぐもの―文学・擬人化・コンテンツ―	単著	2019年7月	『解釈学』第八十六輯	「文学」「擬人化」「コンテンツ」といったキーワードを軸として、メディアの多様化とともに温泉と人をつなぐ伝達手法の変遷について考察。特徴として、メディアの発達に伴い活字から図像への変移が顕著となっている点、擬人化については『水滸伝』や『南総里見八犬伝』といった古典文学からの影響も受けている点などを挙げた。その他、文学を起点としてメディアを横断するコンテンツの問題を「表現」という視点から論じる必要性を指摘した。（pp. 37～46）
35. 福島県における温泉文化とコンテンツ―『温泉むすめ』を一例に―	単著	2019年12月	『芸術文化』第24号	福島県の温泉地におけるコンテンツ『温泉むすめ』の果たしている役割や現状を人文学の視点から考察。長い年月を経て、文化や風習を積み重ねてきた各温泉地の「物語」を表象化して語り直す、再話としての機能を果たしているコンテンツであることを論じた。また問題点としては、表象化には美少女キャラクターの擬人化に伴うジェンダーの問題、またスクナヒコを頂点としている世界観からはイデオロギーの問題等にも留意する必要性を指摘した。（pp. 23～33）
36. 露伴文学における僧侶の位相について	単著	2020年3月	『解釈学』第八十八輯	幸田露伴作品に登場する僧侶に注目し、その役割や特徴などを考察。総じて、露伴作品における僧侶の位相として、善導する僧侶を描く一方で、煩悶葛藤など塵労に埋もれた僧侶、さらには「法縁微妙」な人間模様から「生は相憐れみ、死は相捐つ」ことを示した僧侶まで描かれており、多彩な個性を持った僧侶たちが各作品で存在感を発揮していると考えられる。背景には、作者露伴自身のその折々の内奥と関係している点を指摘した。（pp. 39～44）

37. 不可視の恐怖と人心―露伴の言説を視座として―	単著	2020年11月	『解釈学』第九十輯	約百年前のスペインかぜに代表される、目に見えない感染症に作家･露伴がどのように受け止め､時代に向き合ったのかを考察。露伴自身、大局を見据えた冷静な視点の必要性や人間の意思ではままならないことを「宿命」といった言葉で示しながらも、病を通して道を見出す言説も確認できる。病者の苦しさは忍びざることでありながらも、そのことを契機に「意義あるように」前向きに捉えていく視点が特徴として挙げられる。（pp. 23～28）
38. メディアの中の温泉地と文化の位相―東北地方における『温泉むすめ』の展開―	単著	2020年12月	『芸術文化』第25号	『温泉むすめ』の視覚的特徴ともいえる、各温泉地に設置されている等身大パネルに注目し、温泉地を表現するツールとしての役割や地元民の認識、温泉地における物語の抽象化や再構成について検証を試みた。特徴としては、等身大パネルがキャラクターという存在そのものを表現するツールとともに、各温泉地を表現するツールとしても機能している点を指摘。そこにゲンダル・ウォルトンやピアジェの「象徴機能」などの理論を援用しながら論証した。（pp. 57～68）
39. 国語教育の未来予想図―新学習指導要領に関する一考察―	単著	2021年3月	『解釈学』第九十一輯	本稿では、2022年度より施行される高等学校国語科の新指導要領に関して、現行制度との差異や問題点などを検証しつつ、筆者自身の教壇での経験を踏まえながら考察した。とりわけ、批判の的となった「論理国語」と「文学国語」の棲み分けについては、そこに至る背景を論証。早急な改革に警鐘を鳴らすとともに、今まで文学側も文学の有用性や汎用性なとを発信してこなかった点を挙げ、今後の国語教育のあり方を論じた。（pp. 1～10）
40. 明治期の「児童文学」と仏教思想―露伴文学を視座として―（査読付）	単著	2021年11月	『解釈学』第九十三輯	本稿では、露伴作品の中でも仏典の引用が認められる『宝の蔵』を手がかりに、明治期における「児童文学」と仏教思想について考察。当時は国家樹立に必須な富国強兵や殖産興業を担う国民の教育や啓発誘導が中心である中、露伴の言う「其實」を獲得することが要請されていた。露伴自身、そうした時代の潮流の中で、仏典渉猟から吸収した様々な知見を少年文学などにも織り交ぜながら発表していたことを論じた。（pp. 49～55）

41. 神社と奉納―コンテンツ『温泉むすめ』がもたらす文化の再構築―	単著	2021年12月	『芸術文化』第26号	本稿では、神社と奉納といった枠組みから『温泉むすめ』がもたらす文化の再構築といった視点を中心に考察。スクナヒコを筆頭として、下級の神様というキャラクター設定や鳥居からの瞬間移動を行うといった物語の世界観は、キャラクター等身大パネルを「ご神体」として認識し、また缶バッジなどの「奉納」や「祭壇」といった形にまで表出している。さらに、ファンや地元民からの自発的現象も認められ、運営者側の意図や思惑から離れており、継続性を持ったコンテンツとしての可能性を論じた。（pp. 63～73）
42. モチーフとしての文学の引用と再構築―「文学の汎用性」という視点―	単著	2022年1月	『日本文学』第七十一巻第一号	本稿では、メディア表現すなわちポップカルチャーの中における文学の引用や再構築、読者受容のあり方の変化について考察した。メディアコンテンツの中にある文学要素の抽出（モチーフとしての文学）を通して、文学の汎用性やその可能性について、漫画やアニメなどの表象文化のさらなる展開は明らかであり、活字の優位性（文学の優位性）を見出そうとしてももはや困難である点を指摘。作家論・作品論を踏まえながら、文学と表象文化といった横断的な研究の必要性を論じた。（pp. 54～61）
43. 高等教育機関での文章表現に関する一考察―高専・短大での実践例から―	単著	2022年3月	『解釈学』第九十四輯	本稿では、筆者自身の高専や短大での文章表現指導の経験から気づいたことを提示し、これからの文章表現の在り方について考察。とりわけ高等専門学校（高専）や短期大学では、実社会に直結した形での文章表現指導としての色彩が強く、かつ少子化に伴い低倍率で入学する学生の基礎学力担保など、教える側のきめ細かな指導の必要性は高いと言える。コロナ禍におけるオンライン指導にも言及しつつ、在学時と就職時両面を意識した形での授業展開を行う大切さについて、実践例を挙げながら論じた。（pp. 55～61）

44. 持続可能なコンテンツツーリズムとしての試み―『温泉むすめ』を視座として―	単著	2022年3月	『コンテンツツーリズム学会論文集』Vol.9	2021年11月にコンテンツツーリズム学会第9回論文発表大会で発表した内容を論文化。持続可能なコンテンツツーリズムの一階梯として、『温泉むすめ』の考察から抽出される新たな知見や可能性について論究。『温泉むすめ』が三位一体（地域・ファン・運営者）のバランスを保持しつつ、運営者を土台として、地域・ファン双方向型の継続した展開が認められることを論じた。（pp.36～43）
45. 表象文化における情報発信と受容のあり方―コンテンツ『温泉むすめ』の展開と地域主導の文化再構築―	単著	2022年12月	『芸術文化』第27号	『温泉むすめ』の５年間の取り組みを概観し、コロナ禍においても地域主導という軸で着実に進めている点に注目。その原動力として地域キーマンの積極的展開とファンのリピート率の高さ、これらをサポートする運営者側の「地域主導」といった姿勢の堅持を特徴として挙げた。その他、「ツイフェミ騒動」にも言及し、実証的な論証を以て、総括を示した。（pp.52～63）
46. 保育士養成校における言語活動の位相―文章表現の授業を一例に―	単著	2023年3月	『解釈学』第九十七輯	筆者自身の高専と短大における日本語表現（文章表現）の授業を実践通して、気づいたことをいくつかの実践例を挙げながら考察。とりわけ高専・短大ともに入学時から実社会を見据えた文章表現指導としての色彩が強く、両者の共通事項は多い。コロナ禍における授業展開にも触れながら、在学時と就職時両面を意識した授業展開の在り方について論じた。（pp.47～54）
（紀要論文） 1. 国語教育における知識とイメージの展開―文学とサブカルチャーの融合とその可能性―	単著	2017年2月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第57号	現在、高等学校の国語教科書にある「羅生門」や「山月記」、「こころ」等の定番教材には、既に漫画が登場しており、かつ一定の時間が経過している。そこで本稿では、なかなか活字では理解しにくい場面について、漫画といった視覚的媒体で補完することが容易になった現況を踏まえ、サブカルチャーを用いた形での授業展開とその可能性や問題点を検証。総じて、これからの国語教育のあり方について授業実践例を踏まえ論証した。（pp.187～191）

2. 西黒門町という「磁場」―樋口一葉を始めとした６名の著名人―	単著	2017年12月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第58号	黒門町は現在の上野一丁目～三丁目を指すが、当地には明治二十年前後、樋口一葉を始め岡倉天心、荻野吟子、鄭永慶、平福穂庵、石井亮一など、文学・美術・医学・福祉において歴史に名を刻んだ著名人が一時ではあるものの同時期に居住していたことを指摘。彼らのほとんどが黒門町時代では、未だ著名人になる前の「人生の助走の時期」であった。当時の資料を駆使し、彼らの動向について検証した。（pp. 111～118）
3. 俳人としての谷口喜作―芥川龍之介・河東碧梧桐らとの交友を中心に―	単著	2018年12月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第59号	芥川龍之介や河東碧梧桐など、著名な文人たちと接点のあった谷口喜作は、和菓子屋「うさぎや」（現在も上野に所在）の店主を務める一方、俳人としても活動していた。しかし俳人としての評価はもとより人物像についても今までほとんど研究されてこなかった。そこで本稿では喜作の書き残した当時の資料を駆使し、芥川や碧梧桐との詳細な関わり、俳人としての才覚について検証し、谷口喜作という文人の輪郭の一端を明確にした。（pp. 159～166）
4.「ふらいんぐうぃっち」における地域表象の形成―メディアコンテンツとローカルツーリズムの接続をめぐって―	共著	2018年12月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第59号	石塚千尋『ふらいんぐうぃっち』を例に、従来、等閑に付されがちであった観光という現象を生みだしているメディアコンテンツそのものへの分析をすべく、ローカルアイデンティティの構築過程ならびにローカルツーリズムを巡る問題を視野に入れながら考察。作品舞台である青森県弘前市には、地域内部と周縁からの視点、地域外部からの視点があり、この二つの視点が物語の中で重なり合い、表現されていることを論じた。 （pp. 167～171を担当） 執筆者：渡辺賢治、森覚
5. 人文知の表現方法と汎用性―コンテンツ『温泉むすめ』における擬人化の役割―	単著	2020年3月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第60号	人文知の中でも文学における擬人化という表現方法に注目しつつ、表象文化―ポップカルチャーとの接続性についての検証を試みた。好例として、昨今、全国の温泉地を美少女キャラクターとして擬人化し、着実な展開を見せているキャラクターコンテンツ『温泉むすめ』を対象とし、そこから、文学作品（活字）からコンテンツ（図像）へのシフトといった現象を考察し、文学すなわち人文知の汎用性について論じた。 （pp. 91～98）

6. 『ふらいんぐうぃっち』にみる地域表象の二重性―地域へ向けられる内と外からのまなざし―	共著	2020年3月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第60号	平成24年8月9日より月刊雑誌『別冊少年マガジン』誌上で連載が開始され、平成28年にテレビアニメ化された石塚千尋のマンガ『ふらいんぐうぃっち』を取り上げ、青森県弘前市の観光振興にも利用された本作から読みとれる地域表象について考察。石塚自身、出身者として見慣れていた故郷の認識と、東京に出た出郷者として改めて意図的に顧みられた故郷への再認識から、地域表象の二重性が見てとれることを論じた。（pp. 99～103を担当） 執筆者：渡辺賢治、森覚
7. 谷口喜作と明治・大正時代―文人墨客との接点―	単著	2021年3月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第61号	上野「うさぎや」初代店主・谷口喜作は文人墨客との交流も多く、尾崎紅葉や川上音二郎など、当代を代表する者との交流が認められる。本稿では、喜作が当時、紅葉や音二郎を始めとした文人墨客とどのような交流をしていたのか、またそのことが自身のその後の人生にどのような影響を与えているのか。可能な限り当時の資料を駆使して検証を重ね、喜作像の輪郭把握に努めた。（pp. 133～140）
8. 『温泉むすめ』の展開と地方創生―コンテンツの可能性とその役割―	単著	2021年3月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第61号	『温泉むすめ』というコンテンツを通じて、観光行動とキャラクターの相関関係について考察。注視すべき点として、個々の事例の列挙に終始するのではなく「ツーリズム」と「コンテンツ」との相関関係を見据えた考察に力点を置いたことである。そこから『温泉むすめ』は各温泉地の歴史や文化、習慣などを等身大パネルを始めとしたグッズなどの図像を通して、物語を再構築するきっかけとしての役割を果たしていることを論じた。（pp. 141～150）
9. メディアを越境するコンテンツ―マンガ・アニメ・ゲームに引用されるモチーフとしての文学―	共著	2021年3月	『福島工業高等専門学校 研究紀要』第61号	多様な媒体が並存し、複合的に連関し合う現在のメディア環境において、モチーフとしての文学は、媒体間を越境し、再構成され、新たなコンテンツに組み込まれる。本論文では、そのような媒体と媒体が、複雑に連関し合うネットワーク空間の中で、文学を引用する表現の事例を取りあげ、現代のメディアミックス時代における文学の受容を考察した。（pp. 151～155を担当） 執筆者：渡辺賢治、森覚

10. 幸田露伴と「児童文学」に関する一考察	単著	2022年3月	『常磐短期大学研究紀要』第50号	本稿では、露伴文学における「児童文学」の位置づけの一階梯として、『宝の蔵』や「風流微塵蔵」（明治二十六年一月二十八日～同二十八年四月五日『国会』）など、同時期に発表した作品や身辺状況にも触れながら、露伴と「児童文学」に関する考察を行った。明治二十年代半ばの露伴の文業を概観すると、児童向け・大人向け作品はともかく互いに連動している点が特徴として挙げられ、「児童文学」は露伴文学形成の一部分を担っていることを指摘した。（pp. 15～27）
11. 絵本・紙芝居世界で展開する日本近代文学―多メディア時代における文学の位相―	単著	2023年3月	『常磐短期大学研究紀要』第51号	絵本や紙芝居における文学作品の表現や活用の現状を踏まえ、活字から図像といった他のメディアへのシフトを通してうかがえる、文学の言語表現の変形について考察。そこから言語表現主体の文学作品にもとづき、いかなる図像と言語が創出されているのか、絵本化・紙芝居化された文学作品を例にその変形への問題意識も視野に入れ、論及を試みた。（pp. 1～13）
（辞書･翻訳書等）				
（報告書･会報等） 1. 〈報告書〉 1. アジア文化との比較に見る日本の「私小説」―アジア諸言語、英語との翻訳比較を契機に―	共著	2008年3月	2006年度～2007年度科学研究費補助金（基礎研究Ｃ）研究成果報告書 18520138（法政大学） （全368ページ）	（全体概要）西洋文学基準の「私小説」評価から脱却し、言語や風土、文化背景が類似する東アジアとの比較から 「私小説」を捉え直した。 （担当部分概要）台湾における「私小説」を検証し、アジアにおける〈私〉表現について様々な角度から論じた。 （pp. 115～116を担当） 研究代表者：勝又浩 共同執筆者：彭丹、姜宇源庸、梅澤亜由美、魏大海、李漢正、楊偉、丁妮娅、大西望、安英姫、渡辺賢治、齋藤秀昭、山中秀樹、山根知子、李文茹、松下奈津美、申京淑、楊天曦、尹相仁、金子わこ、伊藤博

2. 〈研究ノート〉 金沢文庫本『言泉集』の引用文献について	単著	2006年3月	『国文学踏査』第十八号	金沢文庫本『言泉集』「亡父帖」の「四帖之四」において「須闍太子割己肉供須父母」の項で引用されている「私勘盂蘭盆衆記」について考察。叡山文庫真如蔵本との比較を踏まえ、「私勘盂蘭盆衆記」は宗密著「盂蘭盆経疏記」である可能性を指摘。約百五十にも及ぶ『言泉集』の引用書物が必ずしも引用名通りの書物ではないことを論証した。 （pp.133 ～137）
3. 〈研究ノート〉 コンテンツ『温泉むすめ』の展開とその可能性―イメージの創出とツーリズム―	単著	2020年3月	『コンテンツツーリズム学会論文集』Vol.7	本稿では、学会発表をもとに『温泉むすめ』の展開している現象面とともにコンテンツ自体の分析を通して、温泉地をめぐるツーリズムとしての意味や可能性を考察。そこから各温泉地における温泉の神様としての物語を主軸として、従来とは異なるスケールでの展開（日本全国〈＋海外〉）、各地でのイベントを精力的に開催できる送客力の強さや、三位一体（地域・ファン・運営者側）のバランスが図られていることを論じた。（pp.78 ～86）
4. 〈書評〉 〈特集・現代文学の最前線〉島本理生著『生まれる森』	単著	2005年6月	『法政文芸』創刊号	掲載誌の「現代文学の最前線」という特集テーマのもと、島本理生『生まれる森』についての書評。『生まれる森』で描かれた世界は既発表の「シルエット」や『リトル・バイ・リトル』と同様に、主人公が恋で悩み傷つき、そこから他者との交わりによって解決の糸口を探るといった形式で展開していく。読みやすいが恋愛の奥深さを味わえる点を本書の特徴として挙げた。（pp.144～145）
5. 〈書評〉 竹浪直人「葛西善蔵「雪をんな」―弘前の雪女伝承を起点に―」印象記	単著	2018年12月	『日本近代文学会東北支部会報』第57号	平成30年度日本近代文学会東北支部夏季大会における竹浪直人氏の発表に関する印象記。竹浪氏は主に「雪をんな」の研究史（戦前・戦後）を始め、作品発表までの経緯、津軽（特に弘前）における雪女の伝承、当時の作者の動向に関して焦点を当てた発表を評価。併せて、悠久の時の中で津軽という風土から生まれた、近代人の苦悩の物語が雪女とオーバーラップした、若き日の葛西だからこそ描けた作品であるということに特徴を見出している点に氏の独自性があるものと評した。（pp.3～5）

6. 〈座談会〉 越境する文学とメディア表現―ポップカルチャーへと拡張する文学の汎用性―	共著	2022年1月	『日本文学』第七十一巻第一号	多メディア時代における文学の引用について、言語表現のみに留まらない現況を踏まえ「文学の汎用性」をキーワードに検証。各々三者の研究視座を土台にポスト・グーテンベルク時代において、文学は様々な表現と連関しながらメディアのジャンルを越境した引用関係の上に成立していることを指摘。総じて、ネットやＳＮＳの展開が結果として「群れとしての作者」を増殖させ、さらに群れとしての作者と言いながら読者としての役割も果たしている点などを論じた。（pp. 74～78） 座談会参加者：渡辺賢治、大西永昭、森覚
（国際学会発表） 1. 〈パネル発表〉文学から文学社会学へのシフト―表現・メディア・再話― （担当論題：メディア表現と文学の汎用性―活字から図像へ―）	共同	2019年11月	日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会　合同国際研究集会 （於 共立女子大学）	昨今の『文豪ストレイドッグス』や『文豪とアルケミスト』を絡めた文学研究の現状を整理した上で、柄谷行人『近代文学の終り』における「活字から図像への視点から近世的な小説のあり方への回帰」という側面に着目、そこから幸田露伴「硯海水滸伝」を挙げ、明治期にも現代の漫画やアニメに見られる、文豪のキャラ化に類似する作品表現があったことを論じた。 発表者：渡辺賢治、森覚、大西永昭（それぞれパネルテーマに則し各担当を決めて発表）
（国内学会発表） 1. 幸田露伴研究―「一口剣」を中心に―	単独	2005年10月	2005年度 大正大学大学院学内学術研究発表会 （於 大正大学）	従来、先行研究では論じられていなかった「一口剣」に焦点を当て、作品分析や執筆状況等を考察。執筆時に記された「地獄渓日記」や坪内逍遙宛書簡の検証を通して、当時、露伴が自身の作風態度に疑問を抱いていたことを論証。身辺事情と執筆当時の情況から、「一口剣」はテーマとモチーフが密接に結びついた作品であることを発表した。 なお、学術論文1.「幸田露伴研究―「一口剣」を中心に―」で、『大正大学大学院研究論集』第三十号に掲載済。

2. 〈私小説・理論と実作〉坪内逍遙『小説神髄』『当世書生気質』	単独	2006年8月	2006年度 私小説研究会 （於 法政大学大学院）	「私小説・理論と実作」という特集テーマのもと、坪内逍遙『小説神髄』『当世書生気質』から窺える私小説性について発表。私小説的な要素抽出のため「語り手が一人称」「自伝風である」「実名が出てくる」「主人公が作家か、あるいはそれに近い職業」といった項目を設定。そこから『当世書生気質』は模写小説としての性格が強いことを提示した。 なお、学術論文7.「私小説・理論と実作〈特集小論〉「坪内逍遙」」で、『私小説研究』第八号に掲載済。
3. 幸田露伴研究―「風流悟」とその周辺―	単独	2006年10月	2006年度 大正大学大学院学内学術研究発表会 （於 大正大学）	「風流悟」のテーマとモチーフの関係を中心に考察し発表。作品からは「恋と我慾」に翻弄され「悪境」へと入らない「我」を見出していること、また「艶魔伝」で描かれた色道追求の世界と完全に断絶した世界が「風流悟」で提示されていることを指摘。執筆時における露伴の身辺事情、特に恋愛観の振幅を明らかにした。 なお、学術論文4.「幸田露伴「風流悟」試論―明治二十三年の問題その後―」で、『大正大学大学院研究論集』第三十一号に掲載済。
4. 〈アジアの「私」表現〉楊逵「新聞配達夫」	単独	2007年9月	2007年度 私小説研究会 （於 法政大学大学院）	「アジアの〈私〉表現」という特集テーマのもと、楊逵「新聞配達夫」から窺える私小説性について発表。労働者と支配者という二項対立の構図、当時の台湾総督府つまり日本の台湾植民地政策への批判が窺えることを指摘。私小説性への直結はないが、植民地政策や階級対立を軸とした人間観に基軸が置かれていることを指摘した。 なお、学術論文9.「〈私〉表現の夜明け前―楊逵「新聞配達夫」を視座として―」で、『私小説研究』第九号に掲載済。

5. 〈私小説の可能性〉「私」表現の美しさ―三浦哲郎「忍ぶ川」	単独	2008年11月	2008年度 私小説研究会 （於 法政大学大学院）	「私小説の可能性」という特集テーマのもと、三浦哲郎「忍ぶ川」から私小説の可能性について発表。「忍ぶ川」では作者三浦自身が抱える「血」の問題に対し真正面から描くのではなく、むしろ「私」と志乃の純愛を真正面から描くことでそれを乗り越えるべく前向きな「生」の道標が描かれている点を特徴として指摘した。 なお、学術論文11.「〈私小説の可能性〉「私」表現の美しさ―三浦哲郎「忍ぶ川」」で、『私小説研究』第十号に掲載済。
6. 幸田露伴研究―「雪紛 々」を中心に―	単独	2017年12月	2017年度 日本近代文学会 東北支部 冬季大会 （於 仙台ビジネスホテル）	余市時代と密接に関連する「雪紛々」はアイヌを主人公としているが、作品が発表された明治二十年代初期において、同様にアイヌを取り上げた作品は僅かであり、武田仰天子『蝦夷錦』（明治二十六年六月 春陽堂）くらいである。今まで先行研究ではほとんど論じられてない作品であることを踏まえ、当時の資料を駆使しつつ「雪紛々」のテーマとモチーフを解明し、当代文学や露伴文学における位置づけを考察した。
7. 西黒門町という「磁場」―樋口一葉を始めとした６名の著名人―	単独	2018年2月	2017年度 黒門町歴史研究会〈東京都台東区〉 （於 新潟県人会館）	上野一丁目～三丁目一帯は昔時、黒門町と呼ばれており、樋口一葉を始め岡倉天心、荻野吟子、鄭永慶、平福穂庵、石井亮一など文学・美術・医学・福祉において歴史に名を刻んだ著名人が一時ではあるが、同時期に居住していたことを指摘。当時の資料を駆使し、黒門町おける彼らの動向を実証的に論じた。 なお、紀要論文2.「西黒門町という「磁場」―樋口一葉を始めとした６名の著名人―」で、『福島工業高等専門学校 研究紀要』第58号に掲載済。
8. 福島県における温泉文化とコンテンツ―『温泉むすめ』を一例に―	単独	2019年10月	東北芸術文化学会第77回研究例会 （於 宮城教育大学）	近年、温泉地自体を美少女キャラクターとして擬人化し、若者を中心に新たな世代へ温泉地の魅力を発信しているコンテンツとして『温泉むすめ』が挙げられる。本発表では『温泉むすめ』が長い年月を経て文化や風習を積み重ねてきた各温泉地の「物語」を表象化して語り直す、いわば再話としての機能を果たしていることを指摘した。 なお、研究論文35.「福島県における温泉文化とコンテンツ―『温泉むすめ』を一例に― 」で、『芸術文化』第24号に掲載済。

9. コンテンツ『温泉むすめ』の展開とその可能性―再話化とツーリズム―	単独	2019年11月	コンテンツツーリズム学会 第７回論文発表大会 （於 東京経済大学）	『温泉むすめ』の展開している現象面とともにコンテンツ自体の分析を通して、温泉地をめぐるツーリズムとしての意味や可能性を考察。そこから各温泉地における温泉の神様としての物語を主軸として、従来とは異なるスケールでの展開（日本全国〈＋海外〉）、各地でのイベントを精力的に開催できる送客力の強さ、三位一体（地域・ファン・運営者側）のバランスが図られていることを論じた。 なお、研究ノート3.「コンテンツ『温泉むすめ』の展開とその可能性―イメージの創出とツーリズム―」で、『コンテンツツーリズム学会論文集』Vol.7に掲載済。
10. 幸田露伴研究―「露団々」を中心に―	単独	2019年12月	2019年度 日本近代文学会 東北支部 冬季大会 （於 仙台ビジネスホテル）	「露団々」はシンジアとルビナの純愛を主眼としつつ吟蜩子、詩人タイラックといった風流人も登場させている。また「風流仏」や「縁外縁」「毒朱唇」等に繋がる原型としても認められ、初期露伴文学の開陳としてはまさに「一種の志想をもて作り出した」作品と考えられる点を指摘。根底には露伴の余市での経験をもとにしたと考えられる恋の善悪が含まれていることが想定され、「縁外縁」「毒朱唇」における妖艶さにも通底していることを論じた。
11. メディアの中の温泉地と文化の位相―東北地方における『温泉むすめ』の展開―	単独	2020年8月	東北芸術文化学会 第26回大会（オンライン）	『温泉むすめ』の視覚的特徴ともいえる、各温泉地に設置されている等身大パネルに注目。そこから温泉地を表現するツールとしての役割や地元民の認識、温泉地における物語の抽象化や再構成について検証した。特徴として、各温泉地に設置された等身大パネルは伝統・文化・風習を踏まえた展開であること、等身大パネルの所在がファンにとっては、撮影場所すなわちアクセスポイントであり新たな認識となっている点などを挙げた。 なお、学術論文38.「メディアの中の温泉地と文化の位相―東北地方における『温泉むすめ』の展開―」で、『芸術文化』第25号に掲載済。

12. 神社と奉納―コンテンツ『温泉むすめ』がもたらす文化の再構築―	単独	2021年7月	東北芸術文化学会 第27回大会（オンライン）	本発表では、神社と奉納といった枠組みから『温泉むすめ』がもたらす文化の再構築といった視点を中心に考察。スクナヒコを筆頭として、下級の神様というキャラクター設定や鳥居からの瞬間移動を行うといった物語の世界観は、キャラクター等身大パネルを「ご神体」として認識し、また缶バッジなどの「奉納」や「祭壇」といった形にまで表出している。さらに、ファンや地元民からの自発的現象も認められ、運営者側の意図や思惑から離れており、継続性を持ったコンテンツとしての可能性を論じた。 なお、学術論文41.「神社と奉納―コンテンツ『温泉むすめ』がもたらす文化の再構築―」で、『芸術文化』第26号に掲載済。
13. 〈公開シンポジウム〉サブカルと宗教表現―神としての「温泉むすめ」―	単独	2021年9月	大正大学綜合佛教研究所 仏教文化におけるメディア研究会（オンライン）	サブカルと宗教表現という視点から、全国の温泉地を擬人化し、人間と姿の変わらない「温泉の下級の神様」をキャラクターとして扱う『温泉むすめ』に関するシンポジウム。物語世界の根幹となる温泉の神様としての特徴や魅力を提示。コンテンツと地域創生のあり方、物語の再構築を果たす役割などを人文学の見地から言及した。 【パネリスト】渡辺賢治(兼コーディネーター)、橋本竜（『温泉むすめ』総合プロデューサー兼株式会社エンバウンド代表取締役）、佐藤寿昭（『温泉むすめ』原作作家、脚本家）
14. 持続可能なコンテンツツーリズムとしての試み―『温泉むすめ』を視座として―	単独	2021年11月	コンテンツツーリズム学会 第9回論文発表大会（オンライン）	持続可能なコンテンツツーリズムの一階梯として、『温泉むすめ』の考察から抽出される新たな知見や可能性について論究。『温泉むすめ』が三位一体（地域・ファン・運営者）のバランスを意識し、特に運営者は地域主導で実動するまで見守る姿勢にある。それに呼応して地域側も等身大パネル（「ご神体」と呼称）付近に奉納台を設置し、ファンとの交流をSNSで情報発信している。いわば運営者を土台として、地域・ファン双方向型の継続した展開が挙げられる。 なお、学術論文44.「持続可能なコンテンツツーリズムとしての試み―『温泉むすめ』を視座として―」で、『コンテンツツーリズム学会論文集』Vol.9に掲載済。

15. 〈公開シンポジウム〉仏像とフィギュア―現代における「仏」の意味―	共同	2022年5月	大正大学綜合佛教研究所 仏教文化におけるメディア研究会（オンデマンド）	多メディア時代の浸透とともに、仏教も仏像フィギュアといった形で、サブカルチャーの中に溶け込んでいる。そこで、本シンポジウムでは、今まで学術的にほとんど取り上げられてこなかった「仏教」と「フィギュア」といった視点に立って、現代における仏（仏像）の意味について考察。現代における仏教とメディアとの関わりについて、それぞれ三者の視点から論及した。 【パネリスト】今井秀和、森覚、渡辺賢治(兼コーディネーター)
16. 宗教表象と物語の再構築―『御室ムスメ』と『温泉むすめ』を一例に―	単独	2022年6月	大正大学綜合佛教研究所 仏教文化におけるメディア研究会（オンライン）	多メディア時代におけるメディア表現から生成される宗教表象を探る一階梯として、『御室ムスメ』と『温泉むすめ』を一例に考察した。伝統文化に根ざした形で、メディア表現を通じて新たな解釈や価値観を生成している両コンテンツは、地域創生・活性化といった重要な役割を果たしている。ともに当地由来の仏教や神道の要素を取り込みつつ、新たな内容も付加していることを示した。
17. 表象文化における情報発信と受容のあり方―コンテンツ『温泉むすめ』の展開と地域主導の文化再構築―	単独	2022年7月	東北芸術文化学会（於 アエル（仙台）６Ｆセミナールーム）	『温泉むすめ』におけるキーマンの情報発信と受容のあり方に注目し、メディアコンテンツが各地域に一つの文化として定着に到るプロセスを考察。キーマン同士を始め、ファンとの交流も活発に行われ、物語世界の裾野拡大が挙げられる。その一方で、ジェンダーの問題から端を発した問題や「＃温泉むすめ ありがとう」といったハッシュタグの展開など、情報発信の特異性についても論及した。
18. 仏教絵本からライトノベルまで―異世界・地獄・天国―	共同	2022年8月	科研費助成事業 16K02329「近現代日本の仏教絵本におけるブッダのイメージ研究」（研究代表者・森覚）（オンデマンド）	仏教とメディアを基軸として「地獄」や「極楽」といった視点からライトノベルを見た場合、どのような特徴や性格が垣間見られるのか。ライトノベルに描かれた死後の世界（異世界転生も含め）を通して、多メディア時代における仏教とメディアがライトノベルにいかように取り込まれているかを考察すべく、三者それぞれの研究領域から論及した。 【パネリスト】山中智省、森覚、渡辺賢治(兼コーディネーター)

19. 地域コンテンツとしての『温泉むすめ』の可能性	単独	2022年9月	地域コンテンツ研究会 （於 キャンパスプラザ 京都）	現在までの『温泉むすめ』の展開を踏まえつつ、地域コンテンツとしての『温泉むすめ』の可能性について考察。とりわけ、地域・ファン・運営者側の「三位一体」のバランスを維持しつつ、地域デジタル通貨「ルーラコイン」や「ルーラＮＦＴ」の導入も加わり、ダイレクトな形で地域経済活性化に運営者側が関わり始めた点を指摘。新たな展開の萌芽として認められることを示した。
20. （公開シンポジウム）メディアが生成する仮想現実と物語―コスプレイヤーと化粧行動―	共同	2022年10月	常磐短期大学渡辺賢治研究室〈主催〉・大正大学綜合佛教研究所 仏教文化におけるメディア研究会〈協力〉 （オンデマンド）	マンガやアニメなど、メディアの生成したイメージの中（物語の中）で、コスプレレイヤーがどのように現実と虚構世界（仮想世界）をつなぐ機能や役割を果たしているのかを考察。人文学の視点を基盤としつつ現役コスプレイヤーの視点も交え、多メディア時代の中で生きる現代人としての表象文化への認識を、改めて考える契機として示した。 【パネリスト】綱島エンジェル（コスプレイヤー）、森覚、渡辺賢治(兼コーディネーター)
21. （公開シンポジウム）和菓子と文人墨客―うさぎや二代目店主・谷口喜作と本の装丁	共同	2023年3月	常磐短期大学渡辺賢治研究室〈主催〉・大正大学綜合佛教研究所 仏教文化におけるメディア研究会〈協力〉 （オンデマンド）	大正二年創業から現在まで続く老舗の和菓子屋「うさぎや」二代目店主・谷口喜作(1902～48年、本名・弥之助）は、店主としての傍ら、俳人としての活動や本の装丁にも携わり、文人墨客との交流も多かった人物である。喜作の和菓子に対する想いや文人墨客との交流、装丁への美的センスなど、さほど知られていなかった文化人としての側面に迫った。 【パネリスト】谷口拓也（うさぎや店主）、森覚、渡辺賢治(兼コーディネーター)
（演奏会･展覧会等）				
（招待講演･基調講演） 1. 学術的見地から見た「温泉むすめ」全国的ヒットの背景	単独	2020年3月	『ＰＲ Table』 （https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/44973） （ウェブ上のみ掲載）	日本全国各地で展開されている『温泉むすめ』プロジェクトの立ち上がった経緯やその過程で生まれた魅力、コンテンツに対する運営者側のこだわりなどについて、総合プロデューサー橋本竜氏と対談した。プロジェクト推進に際しては、コストや労力を惜しまず、「利他の精神」で地域に貢献するという姿勢を大切に展開していることを述べ、コンテンツを元にした地域共生や地方創生への在り方について論じた。なお、文章は全て渡辺が執筆。

2. 熱意とこだわりが地方の心を動かした――『温泉むすめ』が誕生に至るまで	単独	2020年4月	『ＰＲ Table』（https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/46233） （ウェブ上のみ掲載）	日本全国各地で展開されている『温泉むすめ』プロジェクトの立ち上がった経緯やその過程で生まれた魅力、コンテンツに対する運営者側のこだわりなどについて、総合プロデューサー橋本竜氏と対談した。プロジェクト推進に際しては、コストや労力を惜しまず、「利他の精神」で地域に貢献するという姿勢を大切に展開していることを述べ、コンテンツを元にした地域共生や地方創生への在り方について論じた。なお、文章は全て渡辺が執筆。
3. 未来へとつなぐ『温泉むすめ』プロジェクトの最前線に立つ者たちの姿	単独	2020年5月	『ＰＲ Table』（https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/46367） （ウェブ上のみ掲載）	コンテンツ『温泉むすめ』の最前線に立つ者の視点として、総合プロデューサー橋本竜、アシスタントプロデューサー岡本空と自身の三人で対談を行った。新型コロナウイルスの影響により、バーチャル生放送などウェブ上での展開を否応なく迫られている中、現状におけるコンテンツの活用方法など具体例を挙げ、『温泉むすめ』の特徴を認識。活字から図像へシフトする中での温泉文化の啓発誘導の在り方などを論じた。なお、文章は全て渡辺が執筆。
4. 『温泉むすめ』の可能性を最大限に発揮させる「二人三脚」の力とは？	単独	2020年6月	『talentbook』〈ＰＲ Table〉（https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/46519） （ウェブ上のみ掲載）	『温泉むすめ』プロジェクトでは、常に最前線で陣頭指揮を執るエンバウンド代表の橋本竜とキャスティングを行うオブジェクト代表の吉村尚紀がいる。両名から地域でのイベントを通して、『温泉むすめ』の役割やキャラクターを演じる声優の役割などについて対談。『温泉むすめ』というコンテンツがトークショーやライブを通じて、今後どのように地域活性化を担い、新たな文化として定着させていけるのかを取り上げた。なお、文章は全て渡辺が執筆。
5. 原作小説『温泉むすめ』から生み出される可能性の“源泉”をひも解く	単独	2020年6月	『talentbook』〈ＰＲ Table〉（https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/46651） （ウェブ上のみ掲載）	原作小説『温泉むすめ 神さまだけどアイドルはじめます！』(2017年12月KADOKAWA)を手がける佐藤寿昭と生みの親でもある橋本竜との対談。温泉地を擬人化することの特徴や日本の文化や歴史を踏まえた形での展開の必要性を指摘。各温泉地が物語の世界観を担いつつ地域の想いやキャストのキャラクターに対する解釈、運営者側の地元に寄り添った姿勢などがより充実した世界観の構築に繋がることを確認した。なお、文章は全て渡辺が執筆。

6. エンバウンド社と共に歩んできた裏方から見た『温泉むすめ』の今までとこれから	単独	2020年7月	『talentbook』〈PR Table〉（https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/46767） （ウェブ上のみ掲載）	『温泉むすめ』プロジェクトでは、一つひとつのイベントの裏側に入念な事前準備が行われているが、そうした細やかな準備や段取りについて、「裏方」である秘書の南嶋愛美を迎え対談。代表の橋本竜とともに、イベントの衣装やグッズ管理などを通して、地域創生への役割と意識を披瀝。単なる一過性のブームやビジネス第一主義に偏らない形での、持続性を持った展開やサポートの体制、各温泉地への熱量の必要性を述べた。なお、文章は全て渡辺が執筆。
7. 『温泉むすめ』イラストレーターから紡ぎ出される数々の魅力とその本質	単独	2020年8月	『talentbook』〈PR Table〉（https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/46844） （ウェブ上のみ掲載）	『温泉むすめ』プロジェクトにおいて、欠かせない存在である、イラストレーター・らぐほのえりか氏から見た『温泉むすめ』に関して、 エンバウンド代表・橋本 竜氏とともに渡辺を交えた3名での対談を実施。あくまで消費されるキャラクターではなく、長く愛されるキャラクターの作成に熱量を以て取り組んでいること、また地域やファンなど、多くの人たちに親和性を持った形での描写の大切さを述べた。なお、文章は全て渡辺が執筆。
8. コロナ禍における温泉地活性化の切り札――『温泉むすめ』が地域の明日を切り開く	単独	2020年9月	『talentbook』〈PR Table〉（https://www.talent-book.jp//onsen-musume/stories/46991） （ウェブ上のみ掲載）	コロナ禍から約半年を経た中での『温泉むすめ』の「いま」と「これから」について、エンバウンド代表・橋本竜（『温泉むすめ』総合プロデューサー）と渡辺による対談。厳しい現状に向き合う地域からは、『温泉むすめ』に寄せられる期待や関心などがある点、また地域の実情に合わせ、新たな展開を進めている点などを取り上げた。総じて、地域主導を大切にしながら一過性のブームに左右されない展開を示した。なお、文章は全て渡辺でが執筆。
（受賞（学術賞等）） 1. 2006年（平成18年）度 大正大学人材育成奨学金 受賞	単独	2006年7月	大正大学	幸田露伴を中心とした日本近代文学研究の功績に対して、奨学金（無償）を授与された。

研　究　活　動　項　目						
助成を受けた研究等の名称	代表,分担等の別	種　類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概　　要
（科学研究費採択） 1. アジア文化との比較に見る日本の「私小説」―アジア諸言語、英語との翻訳比較を契機に―	分担	基盤研究C	2006年度～2007年度	法政大学	3,890,000円	（全体概要）西洋文学基準の「私小説」評価から脱却し、言語や風土、文化背景が類似する東アジアとの比較から「私小説」を捉え直した。 （担当部分概要）台湾における「私小説」を検証し、アジアにおける〈私〉表現について様々な角度から論じた。
2. 高専教育は何故難しいのか？―持続可能な高専教育のための当事者エスノグラフィ―	分担	基盤研究C	2021年度～2024年度	福島工業高等専門学校	3,640,000円	（全体概要）従来、専ら大学教育学部等に身を置く外部の教育研究者が第三者的に高等専門学校へ注いできた視点での高専教育を刷新・補完することに対し、当事者による高専教育の現在の課題の解明・言語化・公知化することを主眼とする。 （担当部分概要）高専在職時の人的ネットワークを活用し、高専教育の現場最前線に立つ教員スタッフがそれぞれに抱える、高等教育に関連する課題群のエスノグラフィ研究（聴き取り調査）を行っていく。
（競争的研究助成費獲得（科研費除く））						
（共同研究･受託研究受入れ）						
（奨学･指定寄付金受入れ）						
（学内課題研究（共同研究））						
（学内課題研究（各個研究））						
（知的財産（特許・実用新案等））						